特殊任務！

星乃杏奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特殊任務！

【Ｎコード】
Ｎ９６７３Ｗ

【作者名】
星乃杏奈

【あらすじ】
それは、上司から渡された一枚のチケットから始まった。「お見合いパーティー」に内緒でサクラ参加なんて…。言わなくちゃ、今日こそ本当に話さなきゃ！

01

「ちょっと、相田さん頼み事がある」

今思えば、その上司の一言が事の発端だった。

「なんでしょう」

当時、新しいプロジェクトのメンバーに選ばれたのかなとか少しウキウキした気持ちで席に向かったんだっけ。

「はい、君には特殊任務を行ってもらう」

「へぇ？」

上司が机の中から大切そうに一枚のチケットを取り出した。

それは、ピンク色で薔薇がいっぱい描かれている乙女チックなチケットだった。

期待していた事とは違ったけど、ケチで有名な部長が物を人にあげるなんて。

私はそこに驚いてしまった。

「特殊任務って、これ私に頂けるですか

へぇ、でも私誕生日でもないですし、成績がトップってわけでもないんですけど」

「いや、相田。

よくチケットを見ろ。チケットを」

部長に言われた通り視線をチケットに向けると…

そこには金色の文字で『お見合いパーティー』と書かれていた。

「おっ、お見合いパーティーですか」

「おい、大きい声を出すな。

これは、あくまで特殊任務であり、極秘任務だ」

部長の態度といい、このチケットは何か嫌な予感をむんむんと感じる。

「あのな、実はチケットにも書いてある通りこのパーティーの主催は取引先だ。

しかしだな、このパーティー思いのほか人数が揃わなくてな。

こうやって、上から無理やり券がやって来たわけだ」

まぁ、確かに休みの日にわざわざスタジアムに出向こうとは思わないなー

私だったら、休みの日はゆーっくり目覚ましかけずに二度寝するし。

でも、疑問に思うことがひとつある。

「部長、で何でそのチケットが私に来るんですか」

そうだ。

もともと、女子社員はうちの部だって数人いるのに、よりによって私。

部長の態度を見るに、他の子に声をかけている様子は伺えないし。

「それはだな。

君は、口が上手そうだからだ」

「口の上手さが、このパーティーには必要ですか？」

「口の上手さがいるに決まってるだろう。

人が集まらないというのは、あくまでも極秘の情報でだな。
出席する人間は、あくまで一般の会社関係なく結婚したいと思っていなきゃならないからな」

納得するような、しないような

「もちろん、これはある意味で労力を使うわけだから
特別手当が出るらしいぞ。」
「サクラで手当てって、罪悪感が残りますけど
私じゃなくても、他の子に・・・」

「何も罪悪感を感じることはないぞ。
現に相田さんは結婚してるわけでもなく、騙そうという気もない。
ただこの三時間を大人しーくしていれば、助かる人間がいる。
だったら、手当ての出る人助けいいだろ」

熱心に語る部長を前に、私は首を横に振ることは出来なかった。

02

「で、部長の頼み事。特殊任務ってやつ？
引き受けてしまっちゃたのか」

「はい。
その通りです美紀さま」

結局、あの時反論する言葉が見つからなくて
しぶしぶ。本当にしぶしぶ引き受けることになってしまった。

「でも、いいじゃない考えようによっては」
「手当てが出るからでしょ」

いくら手当てが出るとはいえ、そこまでお金に困ってるわけじゃないし

「手当てとか、そういう問題じゃなくて。
あんた今、フリーな訳だし、ある意味では参加条件満たしてるじゃん。
成人してて今現在未婚っていう条件を」
「何が言いたいのよ」
「だからさ、極秘任務といえども本気で探してみたら？
案外、いい相手見つかるかもよ～」

最近、新しい彼が出来たからかしれないけど言葉の端々に嫌味を感じる。
いい相手なんか居るわけないじゃん、部長に言われたんだから。

「あっ、そうだ。
念のために言っておくが、その男性メンバーも多分君と同じ特殊任務の人間が大半だ。
でも、くれぐれも口を割るなよ。
サクラ　いや、特殊任務であるということを」

私は忍者かよ！

「でも、分からないよー
口を割らずしてゲットできるかもしれないじゃん」
「人事だから言えるのよ
あぁ、気が重たい。重たすぎる」

03

特殊任務、当日
都内某所　外資系ホテル
「へぇー、やっぱ結構意気込んで計画したんだ」

部長の言う『特殊任務』を断る事は当然出来ず、当日を迎えてしまった。
さすが、サクラを動員するだけあってか規模も大きく華やか。

1、サクラだと気づかれてはいけない
2、本気の会社の人間にも見つかってはいけない

1番の理由は、部長にも念を押された話だけど、これは自分の意識次第で良しとして。
2番目の今回の婚活パーティーに本気でお相手を探しにきている会社の人間に見つかるという事が、今後一番面倒になりそうなので避けたい。
私の小さなプライドが『お見合いパーティー』に出たという事を許さないから。
とにかく、この三時間を大人しく地味に過ごそうと決め華やかなバルーンアーチをくぐった。

「お名前を確認できましたので、番号札をとって中にお入り下さい」
私は言われるままに、番号札を貰い会場に入る。

いいなー、同じ休日出勤でも受付で来場者に番号札渡す方が楽だよ。

いざ、会場内に入ると沢山の男女が入り交ざっていた。
部長が言うように、サクラ仕込む程の人数割れが起きたなんて考えられないなー。
サクラが殆どというと、上辺の偽りパーティーって考えると面白いかも。
まっ、どっちみち最後は美紀情報によるとお互い気にいられないと成立しないだからね！

そう考えれば気が楽になったかもと、私は入り口で手渡されたウェルカムドリンクに口づけた。

「あいださん、ちょっと
あいださん」

うん？
後ろから、私の名前を呼ぶ妙な声が聞こえる。
確かに私は『相田』だけども。
ここは、下を向いて、無視しよう。場所が場所だし。
と心の中で呟いていると。

「やっぱり、相田さんだね」

そこには、うちの社きってのエリートでイケメンともてはやされている瀬崎さんの姿があった。

見つかってしまった！
確かに、アルコールの入ったシャンパンのせいもあるけど大人しく地味にしのぐはずが。
もう私、どうすればいいのーーーーーー

04

こんなに近くで、瀬崎さんを見た事は無かったけど噂通り背も高くて顔も良くて
絵本に出てくる王子さまってこんな感じなんだろうなって思わせてくれる。

へぇ、やっぱそういう、何ていうんだろうか
探さなくても見つかる部類の人種がこの会場にも来ていると思うと、
少し笑えてくる。

「一人、ぼーっとしてる様だけど
ちょっと、いいかな？」

「あ、っはい」

そうだ、そうだ。
今、瀬崎さんから声をかけられてたんだ私。

「今日は、自分で参加？」

この質問は、「自分で券を買って参加したのか」と聞きたいのだろう。
部長には、あくまで『特殊任務（サクラ）』って事をバラすなと言われてるけど、
こんな綺麗な人に対して恥ずかしい。

あー、言いなさい私。
今日は少し興味があったから、このパーティーに自分で参加したって
か」

「ごめん、質問が悪かったね
返事が返ってこないという事は、君は会社からの援助組という訳

「っあ」

私が早く答えを返さなかったから、バレたか？バレてしまったか？

「別に、君が悪いんじゃないし大丈夫だよ
俺も援助組だし、聞かされているとおりサクラが大半だから」

「そうなんですか」

そうだよね、じゃないと瀬崎さんも居ないか
やっぱ向こう側の人間だもん。

「取引先の会社、ここのホテルに少し借りがあって
その借りを今回の件で返そうって事らしい。
じゃないと、普通ただ券配って行おうって思わないだろ」

そういう裏があって、私にこの券が回ってきたのか。
瀬崎さんの話を聞いて一人物思いにふけっていると
『それでは、ただ今から2ショットタイム！

ご持参された券に書かれてある同じマーク同じ数字のお相手を探してください。
楽しいトークタイムの始まりです』
と司会の方の声が会場に響いた。

「こんな大勢の中から、お互いのパートナー探すの難しいですよね。
瀬崎さん、ちなみに、どのマークの何番ですか？」
ここでお別れなら、少しでも話して美紀のお土産話にしてやろうと、私は彼に思い切って自分から話しかけててみた。

「ちょっと待って。
えっと、マークは何だろう。
ハートの１６かな、君は？」

「そうですか、こんな大勢の中じゃ難しいと思いますけど
お相手が早く見つかるといいですね。
えーっと、私は。。。」
私は思わず券を二度見してしまった。
この手にしている券にもハートがついていて、かつ番号は１６が刻んである。

「相田さん、ハートの１６じゃん」
「そうみたいですね」

もう、内心は口から心臓が飛び出るくらいドキドキしている。
同じ部署になったことないし、共通の知人が居るわけでも無く。
話をすることが無い上に、変にイケメン。

「まっ、三時間で終わるし
相田さんも、ここでお相手見つけようって気は全然ないんでしょ」

「まぁ」

「じゃ、お互い利害一致ってことで。
このトークタイム終わっても横に居てくれないかな」

「はぁ、瀬崎さんが良ろしければ」

ちょーっと面倒な展開になってきている様な・・・
神様、お願いですから面倒だけは・・・・

05

結局、私は最後まで瀬崎さんと一緒で
晩ご飯までご馳走して頂き、お互いの番号交換までしてしまった。

「何か不思議だなー。
今回はケチ部長が導いてくれたっていうか」
今日交換した瀬崎さんのプロフィール画面を見ながら、まだ私は興奮冷めやらない。

でも、不思議なんだよね。
あれだけ大勢居た中で、チケットの番号がまったく一緒なんて
こんな偶然ってあるんだろうか。。。

「相田さん、ちょっと」

翌日、通常通り業務を行っていると、これまた部長から御呼びがかかった。
もう、部長に呼び出される事、自体が良いことじゃ無い。
さすがに疫病神とまではいかないけど、面倒な話を連れて来るのが部長だ。

「先日は、どうもありがとう。
おかげで、大成功という事で先方も一安心しているそうだ」

「はい、私も雰囲気を楽しめたので良かったです」
ここは、当たり障りの無い言葉で場をしのいで、面倒を言われる前に席に戻りたい。
あー、戻りたい。

「ところでな、これまた君になんだが
これから急ぎで第三会議室の奥の部屋へ行ってくれ」

「第三会議室ではなくて、奥の部屋ですか？」
確か、この会社には会議室は第三までしか無かったはず。
ということは、これまた面倒をふっかけようとしているのか、この人は。

「なーに、怖い顔をしなくても君なら大丈夫と
私からも太鼓判を押したプロジェクトに任命されたんだよ。
胸を張って、うちの部署を代表するという気持ちで行ってきなさい」
とニコニコ笑いながら部長は私の肩にポンと手を置いた。

「はぁ」

「では、第三会議室の奥の部屋へいってらっしゃい」
とりあえず私は、書くものを持って、その第三会議室の奥の部屋へ向かった。

「ここかな」

確かに第三会議室の奥には、私の知らない部屋が存在した。
他にもメンバーが居る中で、何でこんな奥まった部屋でする重大そうなプロジェクトに私が選ばれたのか分からないものの、重い気持ちでドアをノックした。

「失礼します」
とそこで、顔をあげると、、、、
何と、先日あの『特殊任務』でお会いした瀬崎さんの顔があり、内心ビックリ。

「どうぞ、かけたまえ」
驚くことに、そこには普段あまり見かけない社長の姿までである。
一体、また私は今回何に巻き込まれてしまったのだろうか。

06

「人数が揃ったという事で会議を始めようか」

私はよく分からないまま、瀬崎さんの隣に座らされ会議がスタートした。

内容も分からないままの私は社長を前に冷や汗たらたらだ。

「では、会議を始めるにあたって関連資料をお配りしますね」

と、その声の先には美紀が。

そうか、彼女は社長の秘書に最近移動したんだっけなー。

「はい、どうぞ」

意味ありげに、こっそりウィンクしてくる美紀。

今は仕事中でしょ、と思いながら資料を貰った。

「さぁ、開いてくれ」

社長の声で一斉に開かれた資料

その資料には大きな文字で『テスター・ハウス』と書かれていた。

「テスター・ハウスですか？」

思わず聞きなれない言葉だったので、声に出してしまっていた。

「そうだよ相田くん。テスター・ハウス

このプロジェクトは今期最大のものになるからね」

どうやら、社長はこのプロジェクトに社運をかけている感じが大きく伺える。

「では、説明するよ」
と社長はニコニコとそして楽しそうにプロジェクトの概要を話始めた。

「うちの会社は住宅、主にマンションの開発そして売買だが
最近の世情があってか売れ行きが悪い。
そこをどうにかしようというのが、今回のプロジェクトだ。
今回、新規で新しいマンションブランド。
まぁ、完結にいうとルームシェアハウスを作るんだ。」

確か、最近主人公がルームシェアするドラマがあったみたいだし。
可愛い外装と内装で、けっこう売れるんじゃないかと心の中で呟く。

「確かに、家賃は人数分で割れますし
社会人であれば寝に帰る様な感じですから良いかもしれませんね」
と瀬崎さん。

ん？私って、呼ばれる必要あったっけ？

「いや、それだけじゃないんだよ今回は。
このシェアハウスは、ただのシェアハウスではなくて
こう、どというのかな同棲するカップルの未来型シェアハウスなんだ」

ん？

「君達には、今度も特殊任務として、そこに住んで
ブログなんかで広報して欲しいんだ」

んん？

「もう、知らない間同士じゃないだろう
この前の、アレで」

えーーーー！！また、巻き込まれるの！？

06（後書き）

やっと始まりのような感じです　汗

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9673w/

特殊任務！

2011年10月28日18時16分発行